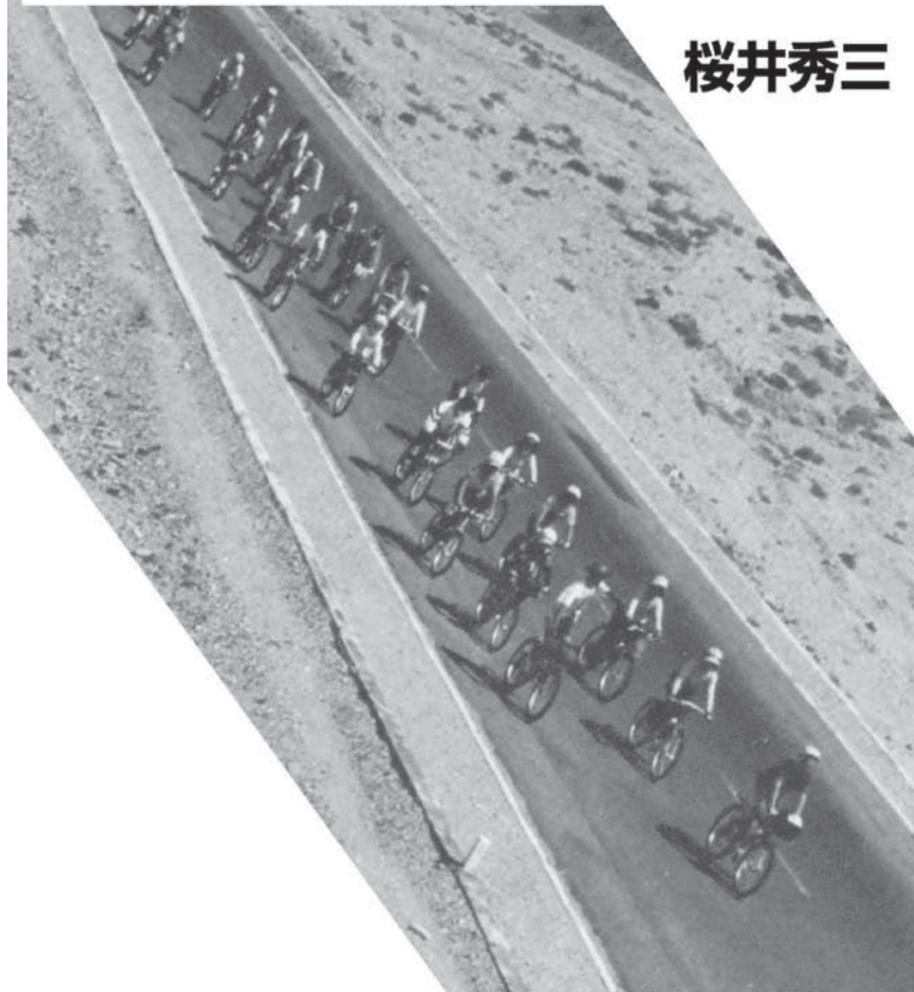


シルクロード・北海道自転車の旅

— 60代「自転車人」サイクル日記 —

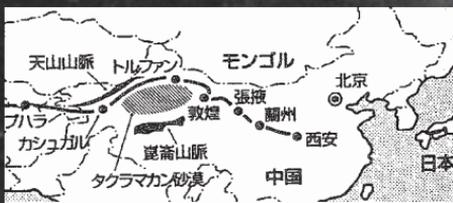
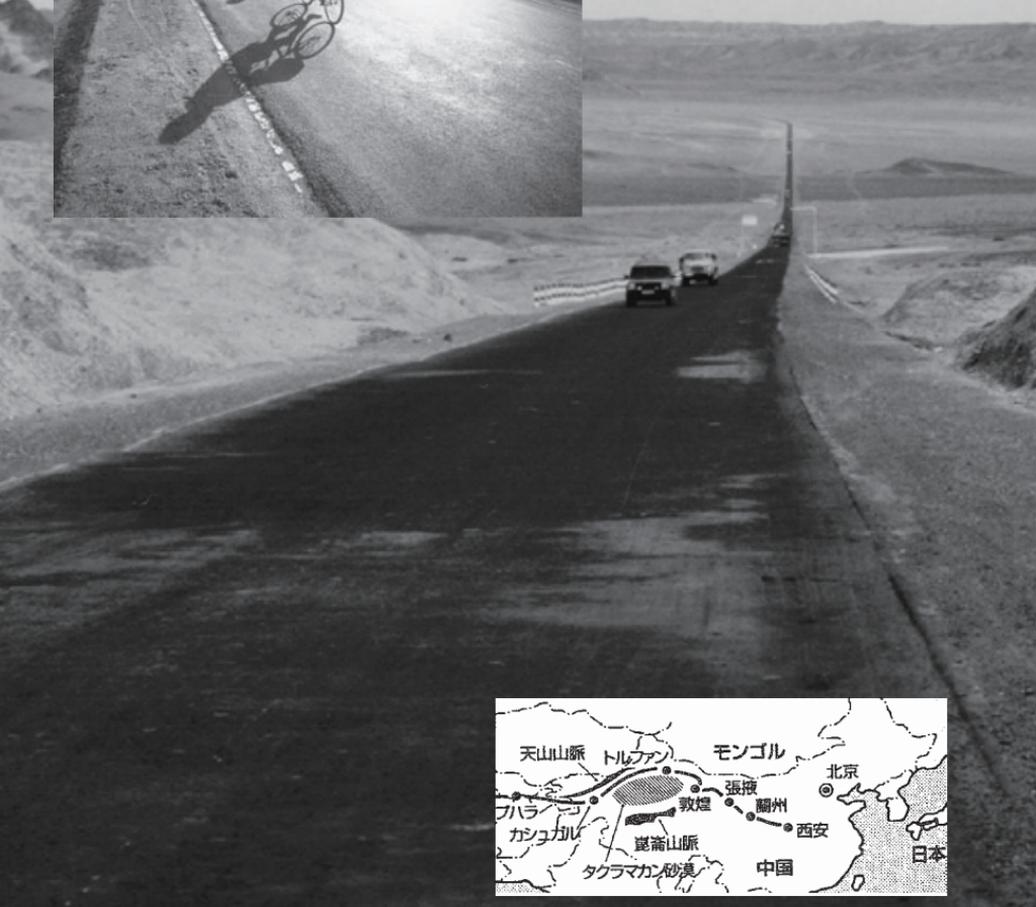
桜井秀三



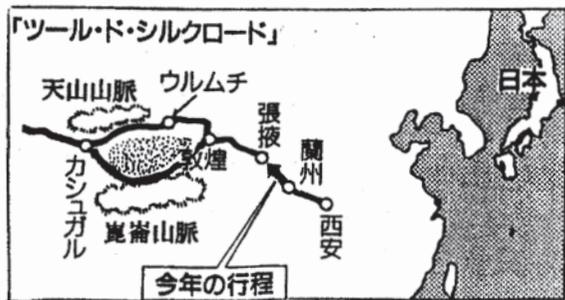
目次

ツール・ド・シルクロード 1994 - 1999	5
94 ツール・ド・シルクロード―蘭州から張掖へ	7
95 ツール・ド・シルクロード―張掖から敦煌へ	12
96 ツール・ド・シルクロード―敦煌から吐魯番へ	22
97 ツール・ド・シルクロード―吐魯番から庫車へ	42
98 ツール・ド・シルクロード―庫車から喀什へ	43
99 ツール・ド・シルクロード―西安から天水へ	49
99 ツール・ド・シルクロード―天水から蘭州へ	56
中国大陸自転車の旅 2000 - 2006	65
00 江南菜の花ラン―南京から蘇州へ	67
00 蘭州から西寧へ―甘肅省から青海省へ	73
01 冬海南島サイクリング	77
01 ハルピンからチチハルへ	84
02 内蒙古の大草原に行く	91
04 雲南省自転車の旅 ―少数民族の里四〇〇キロ―	98
05 青海湖一周三〇〇キロ	108
06 ママチャリの旅―広州から桂林へ	120
ツール・ド・北海道 1993 - 2008	131
93 ツール・ド・北海道―冷夏の北の大地をひとり旅―	133
97 夏ツール・ド・北海道―釧路―襟裳岬―苫小牧―函館	151
03 ツール・ド・北海道―旭川―留萌―宗谷岬―サロマ湖―網走	160
03 秋ツール・ド・北海道―紋別―網走―川湯―釧路	165
04 襟裳岬を巡るツーリング―釧路―襟裳岬―苫小牧	168
08 ツール・ド・北海道―苫小牧―室蘭―函館	174
日本国内自転車の旅 1993 - 2007	177
93 ゴールデンウイーク道志道	178
94 房総半島ひとり旅	181
94 九州輪行の旅	184
96 笹子峠を越えて、桃源郷へ	196

96 ツール・ド・沖繩	199
97 四国ツーリング・ミニ巡礼の旅	205
97 四万十川から足摺岬へ	212
97 カンゾウ咲く佐渡島へ	217
98 本州横断―木崎湖―富士	219
01 八ヶ岳南麓ポタリング	221
01 みちのくひとり旅―盛岡―弘前	223
02 野麦峠を越えて―「日中友好」サイクリング―	228
04 三陸海岸にクラスメイトを訪ねて	235
04 琵琶湖一周チャレンジサイクリング	237
06 中央構造線・秋葉街道二人旅	241
07 茅野―佐久間ダム	243
あとながき	245



ツール・ド・シルクロード 1994 - 1999



94 ツール・ド・シルクロード—蘭州から張掖へ

「地球と話す会」の第二回目のツール・ド・シルクロード、蘭州から張掖までの約五〇〇キロ。参加者男女三十八名。

8月9日(火) 蘭州—苦水

出勤の自転車の洪水に逆流し、公安のサイレンに導かれ、黄河を渡り白塔山の麓を西へと向う。終点までは八日間で走りぬくことになる。国道は割合広い二車線舗装道路である。

ポプラ並木の続くゆるやかな登り坂を二列で走る。隊列は一〇〇メートル余、後にトラック、バスが続き行列をつくる。行き交う通勤者のバスや村人たちから珍しそうに声援がとんでくる。慣れない集団走行なのに手を振り返礼をするので危なっかしい。車間保持と路面を見て走るのが精一杯。景色を見る余裕などとてもない。走行四時間余で最初の招待所へたどり着く。

日中は三〇度を越え、夜間は一〇度台下がり、気温差が激しい。

8月10日(水) 苦水—永登

永登へ向う昼近く雨に見舞われる。この辺りは畑作地帯、国道の両側には農家、畑、雑貨店、食堂がつづき、賑わっている。農家で昼食のお世話になる。初めての土地の人と交流、ひたすらニコニコ顔で首をふるのみ。この辺りの農家はあまり裕福ではないようだが、各部屋は二人住まい位の広さで、長屋風に仕切られ、入口は別々。床は土間を固め、雨水を受けて利用している。家具はデコラ張りが主役顔に並び、村人は金色がお好きなようである。質素ではあるが、突然の来訪者に心温まる持て成しをしてくれた。

標高二一〇〇メートル余となるが、体の異常感を感じられない。膝の痛みは何とも防ぎようがない。今回は日中の気温はさほどきびしくなく、ミネラルウォーターの消費は少ない。食事は猛烈に辛い。食べ終わると、麻酔を打たれたように痺れたまま。食事の度に悪戦苦闘となる。

8月11日(木) 永登―打柴河

三日目頃からは、辛い食事と生野菜のためか、皆下痢にかり出す。発熱のためバスの乗車組が増えだす。やはり、外地では強力な胃袋に鍛えておかないと無事通過させてもらえない。

8月12日(金) 打柴河滞在

打柴河での一日休養日により皆体調を取り戻したようである。

8月13日(土) 打柴河―古浪

コース中最大の難所と嚇かされていた鳥鞘嶺三〇二六メートルを目指す。峠まで二一キロ、七、八度の長い斜面をがんばる。まだ、国道の左右は農家が点在、道路脇ではスイカ、ハミウ

リを山積みにして、旅行者やトラック野郎の休憩所を兼ねたむろしている。麦畑、トウモロコシ、菜の花畑がつづき、豊かな田園風景がつづくが、二五〇〇メートルを過ぎる頃より農地も果てて、ついに周辺は砂漠に変わってきている。

村をはずれると、街道のポプラ並木もときれとぎれとなり低い若木となる。砂漠化防止の植林も見受けられるようになる。谷川沿いの大きく左右にうねる道を六十分、ひたすら地面とにらめっこの末、峠へ。

烈風にあおられて天下絶景、全員悲鳴のような歓声をあげる。乾ききつたのどにスイカが飛ぶように消えてゆく。すごい食欲である。休憩後、一四キロを一気に下る。全員思い思いに快走を楽しむ。息をはずませて快晴の古浪へ着く。

夜はすばらしい星空に誘われて酒の買出し。皇台酒が誇らしげに並んでいた。夕食の青島ワインは女性にも大人気、膝の痛みにまでしみわたるようだった。

8月14日(日) 古浪―武威

古代の涼洲でシルクロードの重要地点と言われた武威へ向かう。武威は大変立派な街である。ホテルの施設は良く、ご婦人向きであった。旧跡、寺院等見るべきものが多くあり、体育館風の建物の東農貿市場―屋台風の大市場―等、活気に満ちあふれていた。

8月15日(月) 武威滞在

バスで田園地帯を一時間も走って砂漠公園へ行く。十時近くなるとさすがに暑い。どこまで

もうねって広がっている。時が止まっているようである。静かに限りなく広がる砂漠。しかし何か、微かな音がするようだ。風に吹かれた小草の震える音のようである。砂がチャリチャリと流れる。やはり砂漠は生きています。

8月16日（火）武威―永昌

武威の街に想いを残して国道はゴビの砂漠の中を進むと、南方遙か彼方に祁連山脈の雪の峰々が白銀に輝いている。雪解けの激流が押し出す橋を渡る。この豊かな水とシルクロードが交叉する土地がオアシスである。本流から引いた水路は甘肅農業を豊かに実らせてきたところである。村を出はざると、周りは不毛のゴビ。真つ直ぐにつづく道路と電柱以外何も無い。何故か道路の上に小鳥が落ちていた。渡りあるく鳥たちにもきびしい自然を思わせる。石ころだらけの砂漠に、抱いていたイメージと違う景観にしばし佇む。

8月17日（水）永昌―山丹

まだ薄暗く肌寒い六時半、目が覚める。標高一九〇〇メートルの永昌も人々のざわめきが聞こえてくる。今日は山丹までの一〇一キロのロングランである。九十九折りの国道を最後の登りとなる峠を目指してあえぐ。

休憩二回を含む走行の後、峠に達する。もうこの辺りはきびしい気候のせいか畑は見あたらない。万里の長城の残骸が近づいてくる。明の長城跡からなおも延々とゴビの砂漠の中までつづき力強く立ちほだかっている。午後からは強い西風にあおられてゆるい上がり下りの道をよ

ろめきながら招待所へ駆け込む。

8月18日（木）山丹―張掖

とうとう走行最終日、張掖へ向かう。

色々な人々との出会い、石炭の煙のただよう村の屋台めぐり、珍しい食物、夕食の団らん等、思いで出をいっぱい背負って、どこまでもこの道がつづけば良いと願いながらひた走った。休憩の度にけつこうつらかったけれど、すばらしい旅だったねと皆感慨ひとしおであった。

今回の隊員の努力もさることながら、中国スタッフの協力なくしては達成出来なかった。思いがけない旅をありがとう。名残おしいシルクロードをあとにする。

（藤井真一記）

※『中国紀行』から転載しました。

95 ツール・ド・シルクロード―張掖から敦煌へ

『地球と話す会』のツール・ド・シルクロードに参加。北京から蘭州まで空路、蘭州から張掖までバスで行き、河西回廊312国道（上海―ウルムチ）を張掖から敦煌まで約六五〇キロのツーリング。

参加者は、四十五名（男性三十一名、女性十四名）。年齢は十五歳から七十歳まで、平均年齢は四十八歳。中国側のサポート隊十名。

8月2日（水）張掖―高台

標高一五〇〇メートルの張掖、朝六時、気温十六度、湿度八十五%、爽やかな高原の朝。

95 ツール・ド・シルクロードのスタート。ほぼ平坦な河西回廊、両側はトウモロコシ畑が広がる。約四〇キロ走った十一時二十分過ぎ、臨沢賓館で昼食。あとで振り返ると、今回のツーリングでは数少ない豪華な昼食だった。昼食後約四十九キロ走って、高台賓館に到着。初日の走行距離約八十九キロ。



8月3日（木）高台―清水

高台の朝、七時、気温十六度、湿度六十六%。今朝も爽やか。今日のルートは、地図上では登り坂があるらしい。時には左側に、時には正面に万年雪を頂いた「祁連山嶺」を眺めながら快適な走行。実際には登りというほどの登りもなかった。

三十六キロ地点の小さなオアシスの木陰で昼食。付近では麦の収穫中、オアシスの麦秋。

昼食のメニューは、マントウ、ゆで卵二個、ソーセージ、ビーフ、ハチミツ、スイカ、杏、ミネラルウォーター。この時はまだ「食堂で食べるよりも楽しい食事だ」、木陰で昼寝した人は「なんとも爽快だ」なんていう声も聞こえた。地元のおじさんが、杏を売りに来たりしてオアシスののんびりした昼下がりがだった。

昼食後、砂漠地帯のやや下り道を、朝から約八十三キロ走ってオアシスの清水に到着。清水の手前からアスファルト舗装が炎熱に溶けていてちよつと難儀。マウンテンバイクタイヤが実力を発揮、スリットタイヤのわが愛車は遅れ気味。どこまで続くのかと心配したが、清水で本日の走行予定距離八十三キロ地点で走行取りやめ。バスで二〇キロ先の酒花研究所の宿泊所まで移動。天楽賓館に泊まる。シャワーの水も出ないので、大の大人がちよつと大騒ぎとなるが、思いのほか汗もかいていないので顔や手を洗い、さっぱり。砂漠の中らしくて良いではないかと思う。午後七時二十分、夕陽が赤く輝き、天空には美しい半月が。

8月4日（金）清水―酒泉

七時、気温二十二度、昨日の走行終点地点まで約二〇キロをバスで戻り、スタート。

昼食は、小さなオアシスの食堂で中華うどん、トマト、インゲンにんにく炒め、茄子炒め、焼き豚など。結構うまかった。お茶を何杯も飲んだ。約七十八キロ走って酒泉到着。張掖から約二四〇キロ走行した。

昨日の宿では水が出なかつたので、今日の酒泉での期待は大きかつたが、期待通り水の出の良いこと。さすが大きなオアシスだ。酒泉にはスリリとした背の高い人、目のパッチリして愛らしい人が増えたような気がするとの声も聞かれた。

酒泉賓館に着くと、五月に中国語を習った北京大学の付民老師から手紙が届いていた。

「祝贺您順利到達酒泉！……沿線看到不少中国人、听到中国人說話、了解了中国的風土人情、体会到、自己労働、的艰苦、鍛鍊了身体、这真是一项絶好的活動、酒泉、酒的泉、一定不少酒、您是海量、可以杯暢飲、但别忘了、第二天还要騎一四一公里呢……」

要するに、「酒泉は酒の沢山あるところだから、お前は大酒飲だから翌日一四一キロも走るのが忘れないように」との温かい心遣いのお手紙だ。

酒泉賓館はすべて北京市内並の施設。カラオケも北京並に太貴了（高い）。

8月5日（土）酒泉滞在、休養日

酒泉公園、夜光杯工場などの参観。夜光杯工場では一人一日十個を加工し、月給は三〇〇元（一

元十一円）とか。酒泉では、Nさんと夜光杯で葡萄酒で乾杯することになっていたのだが、付民老師の忠告にもかかわらず、夜中まで飲み歩き、ついに約束を果たせなかつた。

8月6日（日）酒泉―嘉峪関

酒泉の朝、七時、気温二〇度、湿度六十二％。

今日は、最初の予定では今回のルートでは嘉峪関までの約二〇キロと一番短い行程であつた。ところが予定を変更して、嘉峪関市内を通り過ぎて、上海から三〇〇〇キロの地点まで進む。今日の走行距離約五十三キロ走り、嘉峪関まで戻り、城楼前の野外の木陰で昼食。メニューは、マントウ、ソーセージ、トマト、キュウリ、ジャム、練乳、ミネラルウォーター。キュウリ、トマトは、もちろん丸かじり。それでもけっこううまかつた。

ちなみに一日にスイカは最低五回（夜、昼、おやつ三回）は食べた。

昼食後、万里の長城の西端、嘉峪関城楼を見学して、市内の長城賓館に泊まる。この賓館の客は、圧倒的に日本人ツアー客だ。食事もしっかり日本風の中華だ。

8月7日（月）嘉峪関―玉門鎮

嘉峪関の朝、一六〇メートル、気温二十一度、湿度五十四％。爽やかだ。ポプラ並木の葉がすでに黄色くなり、朝日に輝いている。庭には秋桜が咲き秋の近いことがわかる。

賓館からバスで昨日の地点（上海から三〇〇〇キロの地点）まで行き、玉門市に向けてスタート。道の両側は、砂砂漠と秃山だけが延々と続く。最初の予定では今日は一四〇キロくらいの

走行だったが、昨日今日の分まで走っているの、多分一〇〇キロ以内だろう。

昼食の頃になったが、昼食できそうな場所がない。そのうちに追い風から横風になり、砂嵐風のような砂漠風が吹き始めた。砂漠らしいが、ちょっと気がかりだ。底窩鋪という駅前に二、三軒の家があった。その中の列車を改造した食堂の席だけ借りて、熱風を避けて持込で昼食。この付近では、この程度の砂の舞う風は日常のものだという。気温三十五度、湿度二十六%。

持ち込んで食べた昼食メニュー。マントウ、ゆで卵、ソーセージ、キュウリ、トマト、ミネラルウォーター。沙漠の太陽の強烈さと日陰の有難さを痛感。

三時過ぎ、約九十七キロ走って玉門市に到着。玉門市第二招待所・玉門賓館に泊まる。部屋によってはシャワーもトイレの水も出ない。初めて銭湯ならぬ銭シャワーなるものを体験。

賓館とは名ばかりで、本来は招待所。但し、室温二十五度、湿度七〇%でクーラーなしで快適。夕食後のフルーツにハミ瓜が登場。昨日まではスイカだった。

夜九時過ぎ市内一時停電！懐かしい？みんな外へ出て、半月を眺めてシルクロードの旅の夜を楽しんでいた。

8月8日（火）玉門鎮―双塔

玉門市、標高一五七五メートル。朝六時半、気温二十四度、湿度六〇%。

出発直前にパンク発見。前田さんにチューブ交換してもらい、無事出発。昨日はなんの異常も無かったのに。走行前で不幸中の幸い。



八時前に双塔へ向けて出発。まず進路は北、横風。

上海からの距離三一〇五キロ地辺りから道は西に向う。東南東の風、追い風となり道もやや下り気味。

しかもほぼ一直線、全員が快調に飛ばす飛ばす。まさに飛車（フェイチャー）だ！

十時四〇分、かつてのオアシス橋湾城跡到着。

オアシスも祁連山脈からの水脈の流れが変わると再び砂漠に戻るという証拠がここにある。枯れた大木にかつての面影を見る。その後、約七十三キロ地点で、道端で昼食。

日陰はバスの横にわずかしかない。気温三十四度、湿度四〇%。

メニューは、乾パン風菓子、ゆで卵二個（Yさんのをもらって三個食べた）、トマト、ミネラルウォーター。キュウリなし。もう食欲のない人は食べるものがない。声もなくただ水を流しこむが、マントウを一つだけ食べたらいよいよだ。